2018年7月26日　おでかけサロン「京都迎賓館・仙洞御所」

【京都迎賓館】

京都迎賓館に生きる伝統的技能

京都迎賓館の建設にあたっては、11種類の伝統技能者の技(※ⅰ)を活用しています。また、館内には、14種類の伝統技能(※ⅱ)を活用した多くの調度品を配置しています。

※ⅰ…大工（数寄屋（すきや）)、左官、建具（たてぐ）、表具（ひょうぐ）、畳、錺金物（かざりかなもの）、漆（うるし）、截金（きりかね）、庭園、石造工芸及び竹細

※ⅱ…染、蒔絵（まきえ）、螺鈿（らでん）、錺金物、琺瑯（ついき）、鏨金（ちゅうきん）、竹工芸、京指物（きょうさしもの）、木象嵌（もくぞうがん）、西陣織、羅織物（らおりもの）、京繍（きょうぬい）、京組紐（きょうくみひも）、七宝（しっぽう）

〔聚楽の間〕
上＝花籠（竹工芸）
人間国宝の故 草川尚吉翁(はやかわしょうきち.ぉう)氏〔五世〕の作。
下＝飾り台（漆、螺鈿、竹工芸）

〔藤の間〕
舞台扉（截金）
人間国宝の故 江里佐代子（えりさよこ）氏の作。

〔桐の間〕
座卓（漆）
全長12メートル、漆の一枚仕上げの座卓。

〔桐の間〕
座椅子（蒔絵）
座椅子の背面に蒔絵で「五七の桐」が描かれている。

京都迎賓館の概要

1．建築の目的

京都迎賓館は、海外からの賓客に対し歴史的・文化的側面も含めた幅広い対日理解を確成するため、歴史的・文化的資産の蓄積が大きい京都の地に、国の迎賓施設として建設されたもの

2．主な経緯

平成2年7月	京都府知事、京都市長、京都商工会議所会頭が連名で「平成6年が平安建都1200年の節目に当たることを記念し、京都に和風の迎賓施設を建設していただきたい」旨の要望書を内閣総理大臣に提出
平成3年9月	和風迎賓館建設促進議員連盟が結成
平成6年10月	「迎賓施設の建設について」閣議了解
平成8年10月	設計者に㈱日建設計を選定
平成14年3月	本体工事に着手（㈱大林組を主体としたJV㈱施工）
平成17年2月末日	建設工事竣工
平成17年4月17日	開館披露式典
平成27年	開館10周年

3．施設の概要

・敷地面積	20,140㎡
・構造	鉄筋コンクリート造（一部 鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造）日本の空間を感じられる和風の意匠に配慮し、木を活用
・階数	地上1階、地下1階
・規模	建築面積 約8,000㎡ 延床面積 約16,000㎡

発　行／内閣府迎賓館京都事務所
〒602-0881 京都市上京区京都御苑23
企画・編集／公益財団法人 京都文化交流コンベンションビューロー
〒604-0862 京都市中京区烏丸通四条上ル 京都商工会議所ビル5階

京都迎賓館
Kyoto State Guest House
PHOTOGRAPH BY OSAMU MURAI
正門　行灯　いけばな

正面玄関
当館は、築地塀(ついじべい)を巡らせた品格ある和風の佇まいをしています。入母屋造り(いりもやづくり)など日本建築の伝統的な屋根の形式が組み合わされ、それぞれの技が用途にふさわしい外観を形成しています。それらは千利休が茶の湯を通じて広めた数寄屋造り(すきやづくり)という和の意匠で整えられています。
海外からの賓客のご一行は、車列を組んで正門から入ってこられ、この正面玄関に停車し、迎賓館長が玄関前でお迎えして、ご入館されます。
正面の扉には、樹齢200年の欅(けやき)の一枚板を使用しています。また、賓客をお迎えする際は、正面に屏風を置き、その前にいけばなをしつらえ歓迎の心を表します。
正面玄関

夕映の間 —ゆうばえのま—
夕映の間は、大臣会合などの会議や立礼式(りゅうれいしき)のお茶のおもてなし、晩餐会の待合としても使用されています。
東西の壁面は、日本画家の箱崎睦昌(はこざきむつまさ)氏の下絵を基に織織り(つづれおり)の技法を用いて製作された織物で、それぞれ縦2.3メートル、横8.6メートルです。東側の作品は、京都の東にそびえる比叡山を月が照らす様を描いた「比叡月映(ひえいげつえい)」、西側の作品は、京都の西に連なる愛宕山に夕日が沈む様を描いた「愛宕夕照(あたごゆうしょう)」です。
東西の壁面は可動式になっており、部屋を三分割して使用することができます。

桐の間 —きりのま—
桐の間は、和食を提供する「和の晩餐室」です。最大24名までの会食が可能なこの部屋では、京料理でおもてなしいたします。
食事中に、芸妓(げいこ)さんや舞妓(まいこ)さんによる舞や琴の演奏などが行われ、宴席に彩を添えています。
釘隠(くぎかくし)や襖(ふすま)の唐紙(からかみ)など各所に「五七の桐」が見られますが、これは、明治時代より日本国政府の紋章として使用されているものです。京都迎賓館の紋章でもあります。

聚楽の間 —じゅらくのま—
聚楽の間は、ロビーとして位置付けされる空間です。晩餐会や大臣会合などが行われる際に、随行員の待合としても主に利用されます。
「京指物(きょうさしもの)」の技能と有職織物を用いた安楽椅子が並びます。他の部屋と異なり自然光が入らないことから、座面は鮮やかな赤色の布地を用いて華やかさを演出しています。
部屋名の「聚楽」は16世紀に京都に造営された邸宅「聚楽第(じゅらくだい)」又は(じゅらくてい)でよく知られていますが、「楽」(心が安らかで楽しいこと)を集める(「聚」の字は寄り集まること)といった意味があります。転じて、人が集まった都もさします。

藤の間 —ふじのま—
藤の間は、京都迎賓館で最も大きな部屋で、洋食の晩餐会や歓迎式典の会場として使用されています。楕型にテーブルを並べた宮中晩餐方式でおよそ60名、円卓を並べた場合にはおよそ120名の会食が可能です。
壁面装飾は、日本画家の鹿見喜陌(しかみきよみち)氏の下絵を基に織織り(つづれおり)の技法を用いて製作された織物で、縦3.1メートル、横16.6メートルです。
藤の間の舞台では、舞・能や琴の演奏、雅楽などが披露され、訪れた方々へ日本の伝統文化を紹介しています。

庭園
当館の庭園は、深山幽谷から流れ出る水が注ぎこむ広大な池が、まわりの建物に融け合うように配置されています。これが、古くから日本人の住まいに貫かれた伝統「庭屋一如(ていおくいちにょ)」の思想です。
廊橋を境に池の水深が変わっており、北側の池には錦鯉が放たれています。
廊橋　東西の建物をつなぐ橋。
柏湯　海外からの賓客に日本の文化「舟遊び」を楽しんでいただきます。

2018年7月26日　おでかけサロン「京都迎賓館・仙洞御所」

2018年7月26日　おでかけサロン「京都迎賓館・仙洞御所」

【仙洞御所】

■仙洞御所・京都大宮御所の歴史

仙洞御所とは、皇位を退かれた天皇（上皇、院などといわれる）の御所である。後水尾上皇の御所として江戸時代初期の寛永7年（西暦1630年）に完成した。それと同時にその北に接して東福門院（後水尾上皇の皇后、将軍徳川秀忠の娘和子）の女院御所も建てられた。古くは内裏のように一定の場所にあったわけでもなく、また必ず置かれたわけでもないが、後水尾上皇以来現在の地すなわち京都御所の東南に定まった。後水尾上皇が御存命の間に三度焼失し、その都度再建されてきたが、以後、霊元、中御門、桜町、後桜町、光格の五代の上皇の仙洞御所として使用された。嘉永7年（1854年）の大火で京都御所とともに焼失したのを最後に、ちょうどその時上皇がおられなかったこともあり造営されないままとなった。そのため、現在の仙洞御所には、醒花亭、又新亭の二つの茶室以外に御殿等の建物は全くなく、東側いっぱいに南北に展開する雄大な庭園が往時の面影を残しているだけである。現在の築地塀は安政2年（1855年）、京都御所と共に建造されたものである。

大宮御所とは、皇太后の御所をいう。現在、築地塀内北西にある大宮御所は、慶応3年（1867年）に英照皇太后（孝明天皇の女御）のために女院御所の跡に造営されたものである。英照皇太后が東京に移られた後は、御常御殿のみを残して整理され、現在に伝えられている。

庭園は、仙洞御所の作事奉行であった小堀遠州が寛永7年（1630年）の御所の完成に引き続いて作庭したもので、古図によれば仙洞・女院御所とも石積みの直線的な岸辺を有する斬新な感覚の広大な池をもっていたようである。しかし、度修復拡張等により遠州当時の遺構は南池東岸の一部にわずかに認められるにすぎない。18世紀の前半までに女院御所の庭園（北池）と仙洞御所の庭園（南池）が渠溝（ほり）でつながれた。

■概説

北西の一隅にある大宮御所は、明治5年（1872年）まで英照皇太后のお住まいであったが、現在は、天皇皇后両陛下や皇太子同妃殿下が入洛された際の御宿舎として用いられている。その南は仙洞御所の殿舎が建ち並んでいた跡であるが、現在は松林となっており、大正・昭和の即位の御大典にあたって大饗宴がここに造営された。東側一帯は女院御所と仙洞御所の庭園が擬制によって結ばれて一体となって発展した回遊式大庭園である。総面積9万1千㎡余りで、そのうち大宮御所の面積は約1万6千㎡、仙洞御所の面積は約7万5